

「中学校につながる」

校長 斎藤 滋

まもなく第十七回の卒業式を迎えます。卒業式の実施計画が届くとだんだんと焦り始める私です。実は、六年くらい前からだったと思いますが、卒業証書の児童氏名を自分で書きたいと思うようになり、周囲の反対（直接の反対はありません）に気づかないふりをして半ば強引に始めてしまいました。一人の児童のことでだけ进行を思いうる時間はいくらでも、もしかしたらこの名前を書くときと、誕生日カードを書くときとくらくらくいかもしれません。一般的に何か文章を書くときはその内容によって気持ちが高揚したりして穏やかではいられないこともあるかもしれませんが、誕生日カードのメッセージや証書の名前を書いているときは、心が穏やかになりそのことに集中できることが楽しさの一つでもあります。あと何年か経験を積みめば少しはまともな字が書けるかもしれません、そのときが来るかどうか自信はありません。

さて、先日小学生のお子さんがいらつしやる外部の方とお話することがありました。この学園の小学校と中学校のことをお話してくださいました。それは「小学校は子どものことをよく見てくださるけど、中学校に行くときではないという話を聞きました、どうなのでしょう」というものでした。実際に小学校から中学校に子どもを進ませた保護者から聞いたらしいのですが、私は「それは間違っただらえ方です」と明言しました。このように思われることの原因の一つは小学校にあります。六年間という長い小学校の生活では、自分の力で生活できることがだんだんと増えて、自信を持って生活できるようになることが望まれます。そして、子ども自身が自分で考え、判断し、行動できるようにし

ていくことが小学校の役目です。そして、その延長上に中学校での生活があり、中学校の先生方は少し無理があるのを承知の上で子どもたちを大人社会に入つた人として接するようにしているはずですが、そこには、大人として接してもらえないことが嬉しいと感じる子、少し戸惑う子がいることでしょう。心配なのは、そのように接してもらえないことを受け入れるだけの力がまだ身につけていない子なのです。子どもの意識と親の気持ちはとても似ていることもあり、そういう場合には、中学校での様子を否定的に見てしまうのだと考えます。小学校段階でその準備ができていないのに「中学校ではめんどうをみてもらえない」と考えてしまふのは大きな勘違いであると私は考えます。小学校は居心地のよい場所であるべきなのですが、大切なのはその環境を生かして、強く逞しい人になることを意識できる子に育てていくことです。

「これまでとこれからの学びの形」

教頭 馬場 淳

先日、五年生の理科では溶け残りの出たミョウバンの水溶液をろ過し、できたろ液にミョウバンが溶けているかを調べる実験を行いました。

教科書には、二つの方法しか載っていないのですが、子どもたちに「どのように調べたらよいか。」と問いかけたところ、次のような方法が挙がりました。

- ① ろ液の温度を下げ、ミョウバンが再結晶するかどうかを調べる。
- ② 水を蒸発させて、ミョウバンが出てくるかどうかを調べる。
- ③ ろ液にミョウバンを溶かし、ただの水に溶ける量との差がないか調べる。

④ 同じ体積のろ液と水の重さを比べ、違いがないか調べる。

⑤ 水の中をろ液を流し込み、ゆらゆらしたもの（シユリーレン現象）が見えるかどうかを調べる。中には、「飲んで味を比べる」と発言した児童もいました。どれも、今までの学習や経験を生かした実験方法だったので、友だちの発表を聞いている子どもたちも「なるほど。」と考えに共感する姿が見られました。私も、予想していた以上に多くの方法が出てきたので、とてもうれしく思いました。

一斉授業のよさは、様々な友だちの考えに触れ、自分の理解をさらに深めたり考えの幅を広げたりすることができる点にあります。文科省が新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」を示していますが、どちらの考えの基本にも、児童が能動的に学ぶ姿勢が大事であることは変わらないように思います。

ろ液を作った段階で、子どもたちからはすでに「先生、ろ液は完全に水に戻ったのでしょうか。」と次の課題が疑問として挙がっていました。実験後には結果や考察について、班の友だちと話し合っただけで文章にまとめています。まだ十分とは言えないかもしれませんが、このような取り組みもきっと「主体的・対話的で深い学び」で言われる「課題の発見」「共働的な学び」といった考えにつながっていると思います。

私たちが目指す教育は、これからもこれまでと同じでよいとは思いません。今後も今まで大切にしてきたことを深めながら、よりよい教育の形を模索していく必要があります。子どもたちが「より主体的・対話的で深い学び」ができるような授業が実践していけるように、そのために何より子どもたちが自ら学ぶ姿勢を持ち、その意欲を高めていけるような教育環境を整えていきたいと思

平成二十九年年度 各学級 一年間の振り返り

今年度の初めの学校だよりで各学年の目標を紹介しました。今回は、一年間を振り返り、これまでの成果をご報告致します。

★一年一組★

友だちのよいところや頑張ったところを紹介したとき、自然と笑顔になり、拍手が起きるそんな時間がとても素敵でした。授業で前に出て発表をする子がいると、「がんばれ」という声が聞こえてきました。掃除のとき、机を倒してしまっただけに「大丈夫？手伝うよ」とたくさん友だちが集まっています。今、学校生活の中で当たり前に見えるようになったことも、四月の頃にはできないことでした。「おまつりをしよう」と、「本を作ってみよう」など、子どもたちが「やってみたい」と思ったことに生き生きと挑戦する姿は、とても輝いていました。一年間の中では、成功することよりも失敗することの方が多かったかもしれない。しかし、失敗から学ぶことはたくさんあります。失敗を「成長」と捉え、二年生でも頑張つてほしいと思います。(石井香菜子)

★一年二組★

小学校生活が始まって、新しいスタートを迎えてから、もうすぐ一年が経とうとしています。四月の始めに「人との関わりを大切でできる子」に育つてほしいと願い、三つの学級目標を立てました。この一年間を振り返ってみると、私自身が「人との関わり方」で、子どもたちから学ぶことの多い一年だったと思います。友だちが困っているときにどんな声をかけるか、泣いているときにどのように励ますかなど、子どもたちの声かけを同じように真似させてもらうことも多くありまし

た。人との関わりを大切にできる子は、「周りの人へ優しく接することが出来る子」だと子どもたちから学びました。これからも、周りの人を大切にしていける子たちであってほしいと思います。(尾崎成美)

★二年一組★

四月に子どもたちが掲げた「努力」「勇氣」「思いやり」三つの目標の達成を目指して今日まで取り組んできました。子どもたちは、日々の生活の中に見られる当たり前の行動や成功、そして失敗から学び、それらを生かすことでこれらの目標を達成していきましました。また、運動会やみんなの広場など、友だちと協力しながら取り組むときに生まれる団結力は、二年生とは思えない頼もしさを感じました。一人ひとりの考えに耳を傾け、それについて話し合うことで多くのことを学び、毎日の思いやりある行動の積み重ねが、クラスの結束力を高めていきました。きつと三年生になつても、このクラスで培ったことを生かして、充実した学校生活を送れることと思えます。二年一組でよかつたね！と笑顔で修了式を迎えられそうです。(蒲谷誠一)

★二年二組★

この一年間で、子どもたちは友だちの良い行いや言葉によく気づき、「次は自分もそうしてみよう」と自身の行動に活かすことができてきました。また、以前よりも活かすことに対して「ありがとう」という感謝の気持ちをも自分から伝えることが増えました。クラス目標の「やる気」「たすけあい」「思いやり」では、特に、思いやりのある行動について具体的にどのようなことができるかを考えるようにしてきました。年下である一年生の気持ちを考えてみながら一緒に遊ぶ姿や、みんなが使う水飲み場や登下校時に使うバスを大事に使う姿勢も見られるようになり、徐々に視野が広がってきたのを感じます。三年生では、低学年で培ったことを大切にして、さらに成

長していつてくれることを期待しています。(大木菜々絵)

★二年一組★

みんなで大笑いしたり、「すごい！」と称賛の声をあげたり、友だちに感謝したり。一年間、様々なことがありました。時には真剣に言い争う場面もありました。そんな時、自分の言い分が聞き入れてもらえずに問題解決を教員に求める子が多い印象があります。友だちに耳を傾ける心は成長途上と言えるでしょうか。お互いに気持ちよく受け止めることができるといいなと思います。次年度への宿題です。

心から嬉しいと思うこともありました。発表会の群読でつまづいた時の対応です。子どもや保護者の方々から、舞台上での心温まるエピソードをいくつも聞きました。お互いを信じる心が育つてきたからこそ、乗り越えることができたのでしょうか。四年生でのさらなる成長に期待しています。(猪狩裕亮)

★三年二組★

三年生で日記を毎日書いてきて、出来事が詳しく分かる文章・出来事を客観的に振り返った文章・読み手を楽しませる文章が増えてきたと感じます。嬉しかったこと、気になったこと、悲しかったこと、毎日色々な報告があります。友だちの名前が登場して、それが楽しそうなお話だったり相手をほめていたりすると、その子にも伝えたくになります。まだ普段の様子では自分の思うままの言動が多々見られますが、少しずつ視野が広がってきているのではないかと思います。授業・休み時間・公共の場、それぞれのルールやマナーを繰り返し指導した一年間でしたが、例えば現在、常にチャイムよりも一分早く着席できている子が多いのは、子どもたちの成長の証だと思えます。(田端史子)

★四年一組★

この一年間を振り返ると、子どもたちの温かなやりとりが思い起こされます。例えば、発表会の劇の練習で、思うように演技できない子が、練習の成果を發揮できたときに、「上手になったね」と何人もの子が声をかけてあげた時。運動会の四人五脚の練習で、失敗が連続したために行われた作戦会議で「失敗は誰でもするから、力いっぱいやるしかない！」と勇気づける言葉があつた時。子どもたちは仲間の優しさに触れ、とても温かな笑顔を浮かべていました。努力する姿を応援すること、失敗を受け入れ支え合っていくこと、このようにできるのは、心の成長の証だと思えます。仲間と過ごした日々を糧にし、さらに成長してほしいと思います。(松田絢子)

★四年二組★

四年生に進級して、高学年と同じリズムで学校生活をおくるようになりました。通学や学習など、色々な面で大変になってきたかも知れませんが、同時に、クラブ活動をはじめ、四年生になったからこそ「できること」も増えました。子どもたちにとつて、どのような成長があつた一年だったのかは、それぞれ異なるでしょう。しかしながら、初めは苦労していたことや時間がかかっていたこと、教員に声をかけられながらしていたことなどが、一つひとつ自分たちの力で、スムーズにできるようになっていく姿に、成長を感じずにはいられません。また、そうした中で、クラスの仲間と互いに声をかけ合い、支え合ったり、喜びを分かち合ったりできたことは、誰にも共通する大切な思い出となりました。(浅利直樹)

★五年一組★

クラスの子どもたちは個性豊かで、三十五人全員がいろいろな考えや価値観をもっています。個性のぶつかり合いはお互いの人間を磨いていくよい機会です。この一年間は、本当に多くの経験をする事ができたと思えます。前期は友だちの失敗を責めたりグループ活動でもめ事がすぐに起きたりしていましたが、最近はそれらも少なくなってきました。一年間一緒に生活する中でお互いの考えを理解し、ときには譲ったり、我慢したりすることもありながら、友だちと協調することを優先できるようになってきたと思えます。ただし、子どもの成長にも個人差があり、まだ友だちの考えや個性を受け止めきれない子もいます。それもまた個性。それをも受け止める受容力をみんなが磨いていくことで、変わっていくと思えます。小学校最後の一年は、お互いを認め合い、みんなが輝くクラスをさらに目指していきたいです。(福富直史)

★五年二組★

友だちとの支え合いを大切に過ごした一年でした。楽しいことも大変だったことも一緒に乗り越えました。クラスの団結について振り返る時、週に一度、班ごとにクラスレクを計画した話は欠かせません。みんなが楽しめるものを考えることで、クラスを動かす経験が全員が積み重ねました。スキー教室での車中レクでは、友だちの雰囲気やいいところ、頑張っていることをヒントに友だちを当てるクイズを行いました。一人ひとりのことを集中して考え、クラスの友だちを改めて知り、素敵なところを発見できる時間になりました。子どもたちからの発信でこのような活動ができたのは、仲間を大切にやるやましい気持ちと企画力が育ったことが要にあつたからだと思えます。(平本沙也加)

★六年一組★

年度始めに「頼られる人」「人を大切にできる人」とここで書きました。クラブ・委員会・地区別集会などで、六年生がとても頑張っているという話をよく耳にしました。また休み時間になると、下級生とも交流を深める姿も目にしました。スキー教室では、初めてのスキー教室になる五年生の面倒を六年生がよく見てくれました。私たちも安心して五年生のことを六年生に任せることができ、とても頼もしかったです。

年度末になり、日直のスピーチのテーマを「クラスの点数」にしました。スピーチの際になぜその点数にしたのかの説明で、多くの子が「みんな仲が良い」と言っていました。まだまだ未熟な点もあるとは思いますが、この二年間でできた絆はこれから先も大切にしていってほしいです。(新井航)

★六年二組★

今年度の学校だより第一号に、「六年生として自分のできることを考え、その役割を果たすために努力できる人になってほしい」という願いを書きました。この一年間、様々な場面において、六年生としてできることを体現してくれたと思っています。地区別集会では、班長としてみんなを引っ張る子や、その班長を支えるためにさりげなく下級生に声をかける子がいました。また、スキー教室では、昨年度自分たちがしてもらったことを思い出しながら、時間を意識したり、部屋をきれいにしたりするなど、五年生のよき手本になっていました。一人ひとりができることを考え、その役割を果たす中で、いろいろなことを学んだ一年間だったと思います。この経験を中学校でも生かし、さらに飛躍していくことを期待しています。(佐藤浩太郎)

活動◇紹介

日頃の様々な活動において、実際の実践を厳選し、そこでの様子や指導のねらいなどをご紹介します。

歌唱指導

音楽科では美しい歌声の響き渡る学校づくりに取り組んでいます。入学したばかりの1年生から、「元気な声」「大きな声」だけでなく、「透き通った小川のような声」「やさしい風のような声」で歌うことを目指しています。そのためにまず、「正しい発声方法」を身につけること、そして「聴くこと」、「みんなと合わせようという気持ち」を大切にして授業を行っています。なるべくたくさん耳を澄まして歌う経験をさせるために、授業のはじめと終わりには音楽の授業独自の歌の挨拶をします。挨拶のあとは発声練習もしています。表情や呼吸方法、音程に気を付けて歌うだけでなく、体を動かしながら歌うなど、小さな1年生でも飽きないような工夫もしています。今はまだきれいな声や高い声が出なくても、上手な友だちの歌声を聴いたら真似をして「自分も同じように歌おう」と思うことが大切で、みんなの心が一つになったときにクラスの歌声も一つになるのだと思います。そして、同じ気持ちでお互いの声を聴き合って歌う経験が、中・高学年になったときの美しいハーモニーの合唱へとつながり、それこそが音楽の本当の楽しさであるのだと考えています。

(中島 愛)



発表会の座席について

今年度より、お子さんが発表する演目の時に鑑賞がしやすいよう、優先席をご用意しましたが、いかがだったでしょうか。児童の退場優先、通路の狭さなどの理由から、移動する際に細かく指示を出させていただきました。また、入れ替えをする時に前でお待ちいただいたり、優先席が限られていたり、様々なお願いがあったにもかかわらず、ご協力いただきましてありがとうございました。一方で、後ろの席に荷物を置いたまま、優先席に座られる方が半数程度いたことも事実です。優先席から戻る際に、座る場所がなくて不安な気持ちになった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。保護者の皆様楽しく、安心して観賞していただくために、来年度もご協力のほど、よろしく申し上げます。

今年度の新たな試みについて、お気づきのことやご意見などがありましたら、連絡帳で担任までお知らせください。

(小山内杏実)

